

「津波てんでんこ」への住民理解特性に関する分析

○及川康¹・片田敏孝²

¹東洋大学准教授 理工学部都市環境デザイン学科

²群馬大学大学院教授 理工学研究院環境創生部門

1. はじめに

「津波てんでんこ」という言葉が備え持つ津波避難時における意味・機能の本質的な重要性は、この言葉が流布するきっかけをつくったとされる山下 (2008 など)、後に「釜石の奇跡」として語られることになる津波防災教育を推進してきた片田 (2012 など)、それらを「4つの意味」として再解釈した矢守 (2012 など)、らによってこれまで繰り返し言及され強調されてきたことである。

一方、同時にそこで山下・片田・矢守らが共通して言及する内容のひとつに、注目度やインパクトの高さ故にこの言葉が(適切な解説・解釈が為されないままに)一人歩きを始めたときの誤解や誤用に対する「懸念」が挙げられる。たとえば、「津波のときは、親でも子ども人のことなどは構わず、銘々ばらばらに一時も早く逃げなさい」(山下 2008 : p23) という一義的・表面的な原義“だけ”が「自分だけ助ければ良い」という意として一般の人々に理解され、『津波てんでんこ』は利己主義で薄情だ」という誤解に繋がる事態があるとするならば、それは山下・片田・矢守らによる「懸念」が顕在化した最たる例であるといえよう。

本稿は、このような誤解がどの程度生じ得るのかを把握すべく行った調査の結果を報告するものである。

2. 分析の枠組み

一般の人々が「津波てんでんこ」という語に対して取り得る態度には、少なくとも図-1に示すような4つのパターンが想定し得ると考えられる。本稿では、回答者をこの4つに分類できるようなデザインを施したアンケート調査(実施概要は表-1参照)の結果に基づき考察を加えることとする。

調査では、まず、「津波てんでんこ」という語を聞いたことがあるか否かを問うており、これにより回答者を「L1: 聞いたことがない」と称して分類する。次いで、聞いたことはあるが内容を取り違えて誤って認識している者も想定し得ることから、これを「L2: 間違っていて知っている」と呼称して分類する。回答者の認識の正誤判別には表-2に示す質問を用いており、ここで正答できなかった回答者を L2 とした。さらに、第一

義的・表面的な原義自体は正しく認識しているものの、前述のように『津波てんでんこ』は利己主義で薄情だ」として賛同できないとする意向をもつ回答者を「L3: 正しく知ったうえで非賛同」と呼称する。さいごに、この語の意図に賛同する回答者を「L4: 正しく知ったうえで賛同」と呼称する。賛同/非賛同の峻別は、表-3に示す設問に対する回答の平均値が 4 未満の場合を「非賛同」、4 以上の場合を「賛同」と扱うこととした。

3. 集計結果

(1) 全サンプル対象

まず、全サンプルを対象に4つの分類を試みた結果が図-2(1)である。ここでまず明確なことは、前述のような「懸念(=L3)」の議論の以前に、ほとんどの回答者が「聞いたことがない(L1)」という事態である。インターネット調査という特殊性を鑑みても、調査時点で大多数の人々は「聞いたことがない」状態にあったことは想像に難くない。前述の「(この語に対する)注目度の高さ」などは、ともすると杞憂であった可能性すら否定できない事態である。

(2) 初めて『津波てんでんこ』という語に触れたときの反応

このような状況は、裏を返せば、529名の回答者はこの調査で初めて『津波てんでんこ』という語に触れたということでもある。そこで、この529人のみに対象を絞り、あらためてL2・L3・L4の分類を試みた結果が図-2(2)である。この時点で回答者には『津波てんでんこ』の意味は『津波のときは、親でも子ども人のことなどは構わず、銘々ばらばらに一時も早く逃げなさい』である」という正解は明示されていないことから、結果的には不正解(=L2)が91.1%を占めるに至っている。言うまでもないことであるが、「津波てんでんこ」という語呂のみから正解を類推することは困難である様子が伺われる。

(3) 「津波てんでんこ」の正確な原義を踏まえたいうでの反応

そこで、この529人に対して前述の「正解」をアンケート画面上で提示したうえで、あらためてL3・L4の分類を試みた結果が図-2(3)である。ここでは、「津

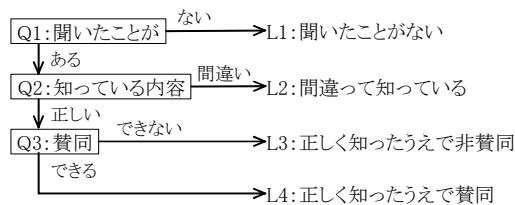


図-1 「津波てんでんこ」に対する認識の分類フロー

表-1 調査実施概要

実施時期	平成 26 年 11 月 19 日～26 日
調査方法	インターネット調査
対象者	インターネット調査会社（マイボイスコム株式会社）保有のモニターリストから抽出（対象は全国、年齢階層・性別で均等割）
有効回答	767 件（全回収数 1020 件から全問同一回答者等を除外）

波てんでんこ」の第一義的・表面的な原義を正しく伝えるだけでは、山下・片田・矢守らの懸念のひとつであった『津波てんでんこ』は利己主義で薄情だという誤解（=L3）を約 7 割の回答者に生じさせてしまう可能性があることを示す結果となっている。

(4) 「津波てんでんこ」の 4 つの意味を踏まえたうえでの反応

調査では、一連の設問の最後に、矢守による『津波てんでんこ』の 4 つの意味を解説する文章を提示し、それへの理解度を問うた後で、L3・L4 の分類に用いる Q3 を再び設けている。前項で「L3：非賛同」であった 365 人について再度分類を試みた結果（図-2(4)）、この「4 つの意味」に対する十分な理解が得られた場合には、その直前まで「L3：非賛同」であったにもかかわらず、その半数以上（最大で 65.3%）が「L4：賛同」へと変容する様子が明瞭に確認された。

4. おわりに

一般の人々の「津波てんでんこ」という語に対する真の理解を得るためには、(適切な解説・解釈が為されないままに) 第一義的・表面的な原義を正確に提示するのみでは誤解を招いてしまう可能性があるのが不十分であることが示された。このことは山下・片田・矢守らの懸念そのものであるとも言える。このような事態の回避には、適切な解説・解釈（たとえば矢守による「4 つの意味」など）が為されることが重要な役割を果たし得ることが改めて確認されたと言える。

参考文献

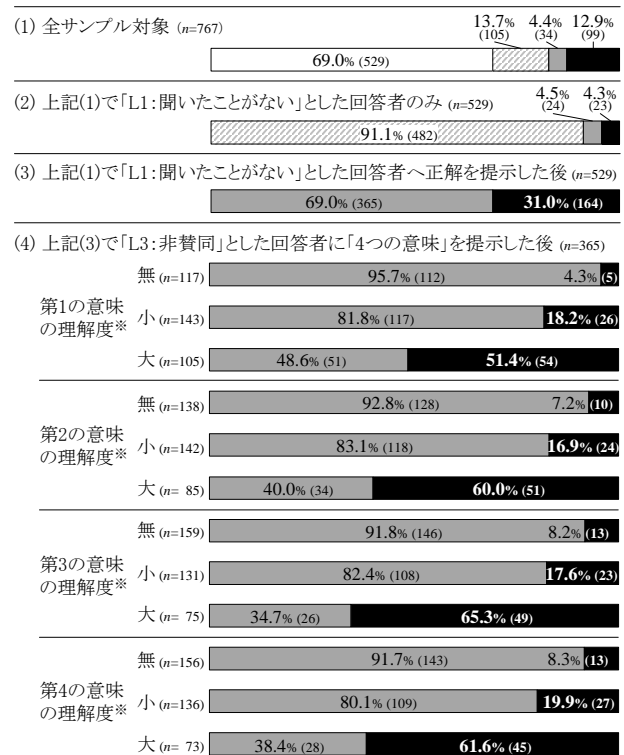
山下文男 (2008) , 津波てんでんこ—近代日本の津波史, 新日本出版社.
 矢守克也 (2012) , 「津波てんでんこ」の 4 つの意味, 自然災害科学, Vol.31, No.1, pp.35-46.
 片田敏孝 (2012) , 人が死なない防災, 集英社.

表-2 Q2 の設問内容

<p>“津波てんでんこ”という言葉の意味として「違うと思うものには×を、「適切だと思うものには○をつけてください」。</p> <p>(1) 津波襲来の事実気づいた住民が、その事実を周辺住民にいち早く知らせるため、太鼓をたたいて大きな音をたてたことで、多くの住民の命が救われたという過去の出来事に関する教訓的言い伝え【正解:×】</p> <p>(2) 津波が来たら、自分ひとりだけで避難しようとせずに、避難が遅れた人たちの援助をしない、という意味【正解:×】</p> <p>(3) 津波が来たら、親でも子でも兄弟でも、人のことはかまわずに、各自でバラバラに一人で高台へと急いで逃げる、という意味【正解:○】</p> <p>(4) 地震や遠雷あるいは大砲のような音、引潮などの津波の前兆現象に警戒せよ、という意味【正解:×】</p> <p>(5) 津波がきたら、既に 200～300 メートル沖に居る船舶は、港に帰るのではなく沖へ退避したほうがよい、という意味【正解:×】</p> <p>(6) 津波を防ぐ防波堤のこと【正解:×】</p>

表-3 Q3 の設問内容

<p>“津波てんでんこ”は直訳すると「津波は各自(めいめい)」ということになりますが、これを防災教訓として解釈すると「津波が来たら、親でも子でも兄弟でも、人のことはかまわずに、各自でバラバラに一人で高台へと急いで逃げる」という意味になるとされています。この解釈について、あなたはどのような印象を持ちましたか？以下の項目に「5:そう思う～1:そう思わない」でお答えください。</p> <p>(1) 自分だけ助けられたい、という考え方のようにみえる (逆転)</p> <p>(2) 薄情で非情だと思う (逆転)</p> <p>(3) 利己主義的な発想だと思う (逆転)</p> <p>(4) このような考え方には賛同できない (逆転)</p> <p>(5) 地域のみみんなで助かろう、という考え方だと思う</p> <p>(6) 親や子どもや兄弟などにこのような考え方を周知すべきだと思う</p> <p>(7) 深く同意する</p>



〔凡例〕 □ L1: 聞いたことがない □ L2: 間違っって知っている □ L3: 正しく知ったうえで非賛同 □ L4: 正しく知ったうえで賛同

※矢守(2012)の『津波てんでんこ』の4つの意味(第1の意味【自助原則の協調】・第2の意味【他者避難の促進】・第3の意味【相互信頼の事前醸成】・第4の意味【生存者の自責の念の低減】)に関する説明文に対する回答者の理解度(0:意味が解らない、1:私はそう思わない～5:私もそう思う)を、0～3を「無」、4を「小」、5を「大」として表示。

図-2 「津波てんでんこ」に対する認識